



2015年4月入職

こげんけん
と
古源兼人

快適とは、当たり前のようにあるべきもの

思いやりを患者さまに気付かせない

快適とは、提供するものではなく、当たり前のようにそこにあるべきものだと思っています。例えば、透析を行っている際に患者さまのスリッパがベッドの下に入り込んでしまうケースは少なくありません。透析が終わってからスリッパをお出しするのも思いやりですが、私は患者さまが気付く前にあらかじめお出ししておくようにしています。快適さの追求は安全性の向上にもつながると思っています、スリッパの例だと、患者さまが自分で取ろうとしたときに転んでしまうという危険を回避させることができます。

患者さまに気付かせない行動をしている一方、患者さまに気付かせる行動も意識しています。目をつむっていたり、視力が落ちていたりする患者さまは「今どういう状況に置かれているのだろう」という不安が少なからずあります。そんなときに無言で穿刺部位を消毒してしまうと、患者さまからするといきなり肌に刺激が加わるわけですから、その驚きはストレスになりかねません。そこで、「今から消毒をします」「今から穿刺をします」など、自分の行動をその都度しっかりと言葉にすることで、心の準備をしていただいています。



学びは、悔しさからも得られる



入職した当初、ある患者さまから「穿刺しなくていい」と言われたことがありました。相性はあるにせよ、全ての患者さまに対応するのがプロだと思っていたので、自分の未熟さにとても悔しい思いをしたのを覚えています。治療のお力にはなれないにしても、できる限りのサポートはしたい。そう思いながら、挨拶や除水計算などは続けていました。するとある日、その方から「刺してみろ」とふいに言われたのです。張り切って穿刺したところ、「センスがない

な」と言われ、すこく落ち込みました。

しかしその後は、穿刺の順番がまわってきたときには担当させていただけるようになり、私が異動になった後も、リリース勤務でお会いしたときには楽しくお話ししています。今振り返ってみて思うのが、あのときに逃げなくてよかったということです。新人の頃だったので、もしかすると逃げ癖がついていたかもしれません。患者さまと信頼関係を築くことができた初めての経験にもなったので、今でも思い出深いです。学びというものは、喜びからだけでなく、悔しさから得られることもあるとしみじみ感じています。

自己研鑽に励み、
スタッフのお手本・目標となり、
全てのお客さまに感動を手伝える
臨床工学技士になります。

古源兼人